

1999・12・19 沖縄タイムス

ジャズの起源はベートーベンにある。
彼のピアノソナタを正確に二百二十五回の彼の誕生日(十二月)を祝して二文を紹介したい。

ジャズはアメリカ合衆国において黒人のヨーロッパ音楽の出会いから誕生した芸術」と定義されている。その際、正邦のヨーロッパ音楽の教育を受けたクシオールが大きな役割を果たしたといわれている。

ジャズは、ピアノ音楽から始まり、黒人特有のリズム感をダイナミックな奏法によるシンコペーション(切分音)ポリリズムさらには即興性が加わって、初期(一九〇年代)のそれが誕生した。その後、ブラスバンド用に編成され、現在のジャズに進化したのである。



田 幸 正 邦

私がジャズの起源として位置付ける作品は、ベートーベン最後のピアノソナタ、第三十二番ハ短調の第二楽章である。主題のアリエッタ(アリア)は黒人讃歌を思わせ、来世へ希望を託した曲である。

第一楽奏でいかに新しい音楽の世界を構築する様子が見え、第二楽奏では新しいリズムの世界を発見したかのごとく、シンコペーションのリズムが徐々に高揚し、未来に対する希望が徐々に膨れ上がる感じが感じられる。

第三楽奏で、突然インスピレーションがわき出て、強烈で爆発的な即興のシンコペーションとポリリズムを展開し、今までにない全く新しい音楽の世界の扉を開いた喜びがわき出る。この第三楽奏に、ジャズの要素のすべてが備わっている。

ジャズの起源 ベートーベンのソナタに

彼は、新しい音楽の世界を創造したことを瞬間的に感じ取ったことであろう。その感動が第四楽奏で高められ、精神が高揚し、さらに昇華するほどの境地にまで到達したことが感じられる。

最後の第五楽奏では、新しい音楽の世界を次世代の人々に託して静かに去っていく様子が感じられ、聴く者の心を激しく揺さぶる見事な構成の楽奏ソナタである。この第二楽章にピアノソナタのジャズルを完結した理由が明確に表現されている。

前作のピアノソナタ第三十一番、私はその第三楽章が全作品の中で最も好きである。それは楽意と悲しみの中で神に祈る曲であるが、この三十二番は悲しみや祈りを超越し、自分が神そのものになった心境で、次世代の人類に大きな遺産を残したという執念から生まれたものである。未来への希望をそのような形で追求したものであり、生命の永遠性の追求でもある、と考える。

ジャズの原型をベートーベンの作品に見出したことは、私にとって大きな驚きと喜びであった。彼は音楽に人間の本性を追求し、尊敬を表した者はいない。彼は何者にも束縛されない独立した自由な精神生活を展開する中で、音楽の世界でも形式にとらわれることなく自由な発想で作品を創造した。

このことは、特に後期の作品から知ることができる。彼はロマン派音楽に限らず、彼の死後七十年後のジャズの世界にまで影響を与えているのである。いかにも、ジャズの誕生を手見していたかのごとく！

前述のクシオールの人々の中に、ベートーベンのピアノソナタ第三十二番を演奏した人がいたであろう。そしてこの曲に感動し、インスピレーションを得た人は幸いである。

(沖縄市泡瀬二ノ三ノ三、大学教官 投稿)